＜論文＞

中国における荷風文学の翻訳

―― 翻訳・出版事情から見た荷風文学受容の様相

呂　　娜
東亜大学大学院　総合学術研究科
延安大学　外国語学院
milky007@163.com

《要　旨》

永井荷風は日本耽美主義の代表的な作家で、数多くの作品を残した。荷風文学は日本において絶えず読み返され、注目されているのみならず、中国においても、2018 年に限ってみても、荷風の随筆や小説の中国語訳が 4 種類も発行された。さらに調べると、ここ数十年来、荷風文学が大量に中国語に訳されたことが分かった。その出版の状況は目を見張るものである。そうした状況を踏まえれば、中国において、荷風文学がどのように翻訳されてきたかについて詳しく調査することには十分な意義があると感じられる。本稿は、荷風文学の中国語訳を対象にして、荷風が文壇に登った当初から今日にかけての中国における荷風文学の翻訳、出版及び主な翻訳者の情報などを考察し、検討するものである。

研究方法としては、荷風文学の中国語訳作品を入手し、出版に関する書誌的な情報を整理するとともに、先鞭をつけた主な翻訳者に対して翻訳や出版の経緯に関するインタビューを行って考察した。さらに、前書きと後書きに表されている、編集者や翻訳者の荷風文学に対する見方についても分析した。研究の結果、中国で荷風文学が受け入れられてきたプロセスと荷風文学に対する翻訳者の考え方の変化が明らかにされた。

キーワード : 永井荷風、文学、中国語訳、出版

はじめに

永井荷風（以下荷風と略す）の文学は中国で多数翻訳・出版されている。2018 年の 1 年間だけでも、荷風文学の中国語訳は目を見張るほど多量に出版された。1 月に陝西師範大学出版社は「悦経典」シリーズを出し、張達訳の《地狱之花》（他 4 篇）をその中の 1 冊として出版した。同じ月に、上海訳文出版社は、譚晶華訳の《竞艳》、《濒东绮谭》、《地狱之花》という 3 冊セットの上製本を発行した。このほかに、5 月に《晴日木屐》[1]（花城出版社）、8 月に《荷风细雨》（上海訳文出版社）という陳徳文訳の随筆集も出版された。

さらに調べると、謝延庄他共訳、李遠喜訳、陳薇訳、陸菁と向軒共訳の小説や、汪正球訳、楊暁鐘他共訳の随筆など、随分古い中国語訳もあれば、ここ十数年来出版されたものもあった。このように、荷風文学の中国における翻訳は、急速に進んでいる現状である。

明治、大正、昭和にわたって日本文壇で活躍していた荷風は小説、詩、日記、随筆、劇の脚本など様々な作品を創作したが、その文学は中国においてどのように読まれ、その中の何が選ばれ、訳されてきたのであろうか。荷風文学が中国語に翻訳されてきたプロセスはどうなっているのであろうか。これらの問題について調査

する必要があると感じられる。文学作品を全面的、客観的に認識するには、視座を世界規模に広げる必要があると、張隆溪（2012，2018）が指摘したように、世界文学の時代が迫ってくる現在、比較文学という研究法によって、荷風文学の中国での翻訳と受容を考察することは、その本質への理解に寄与できると思われる。

本稿では、荷風文学の中国語訳を中心に、荷風が文壇に登った当初から今日にかけての、中国における荷風文学の紹介、翻訳、出版、主な翻訳者の情報及び編集者や翻訳者などの荷風文学に対する考え方を整理して考察する。研究方法としては、荷風文学の中国語訳作品を入手し、出版に関する書誌的な情報を整理するとともに、先鞭をつけた主な翻訳者に対して翻訳や出版の経緯に関するインタビューをして、荷風文学の中国語訳とその翻訳のプロセスを考察する。中国での日本文学の翻訳に関する先行研究に基づき、編集者や翻訳者による前書きと後書きについて簡単に分析し、中国において荷風がどのように読まれているかを究明しようとする。

中国における荷風文学の紹介と翻訳は、戦前と中国の「改革開放」[2]以来の、二つの時期に分けられる。日本と中国の全面的な戦争が始まってから、改革開放までのおよそ40年間はほとんどその空白期間であった。改革開放以来、中国において、荷風文学を翻訳して単行本として刊行する翻訳者が現れ、次第に出版の状況が盛んになってきた。本稿では、中国での荷風文学の中国語訳を時代順に、特に改革開放以来のものを中心に考察していく。中国語の題名と日本語の題名は漢字の違いがあり、混同しやすいので、一応《中国語の題名》、『日本語の題名』という形で区別する。

1. 戦前の中国における荷風文学の紹介と翻訳

中国では、荷風（1879-1959）とほぼ同じ時代に生きた周作人（1885-1967）がその文学を中国に紹介した第一人者とされている（田果，2011：4）。1918年4月、北京大学で行われた小説研究会において周作人は、「日本の最近三十年来の小説の発達」という講演で当時の日本文壇の動向を紹介し、片上天弦のいう「消極的な享楽主義」をもって荷風を評価した[3]。この講演によって、荷風が初めて中国に紹介された。そして、1935年5月刊の《人世间》に発表された「東京散策記」をはじめとして、周作人は荷風の随筆の部分的な内容を選んで翻訳し、批評や感想を加えて紹介した。そのほかに、戦前の中国で中国語に翻訳された荷風文学には、方光燾訳の《旧恨》（《东方杂志》第28巻第6号，1931年，原題：「旧恨」）と《牧场道上》（《文学》第1巻第5期，1933年，原題：「野路のかへり」）、陸少臻訳の《残春杂记》（《文学月刊》第1巻第2期，1936年，原題：「春のおとづれ」）と《狐》（《文学月刊》第1巻第4期，1936年，原題：「狐」）という短編がある。荷風についての紹介は、鳴田（1921）や謝六逸（1923）の論文などもあるが、日本近代文学という総体の一部として大雑把に紹介したもので、周作人と同じように、荷風文学を自然主義文学や消極的な享楽主義と評価している。中国における荷風文学の広がりというと、初めて紹介したのは周作人で、初めて翻訳したのは方光燾であるが、知名度、翻訳したり紹介したりした作品の量、荷風文学に対する長期間にわたる関心や深い理解からみると、周作人は荷風文学を中国に紹介した「第一人者」の名に恥じないと言えよう。そのため、本節では周作人を中心に戦前の中国における荷風文学の紹介と翻訳を検討していく。

魯迅の弟で、周家の次男として生まれた周作人は、1906年から1911年まで5年間ほど日本に留学した。帰国後、日本文学を積極的に中国語に翻訳し、西洋と日本の新思想、新文学を中国文壇に紹介した。戦前の日本文壇において「日本文学通」として知られていた。「散文大師ともいわれたほどの周作人は、その一生に三千篇余りの散文、四十余りの散文集を発表した」（湯麗敏，2001：151）。五四[4]新文化運動において、中国新文学に大きく貢献した文学啓蒙家の一人でもある。「周作人という人物の最も際立つ特徴である「翻訳家」としての一面、或いは自ら「抄文公」と称するように、自らの思想

に見合った文章を引用したり翻訳したりして自分の言説を代弁させるという方法の、初期の形がすでにみられる」（森雅子，2005：80）。確かに、周作人は荷風の随筆の題名を中国語に訳してそのまま題名とし、内容も引用して翻訳したり感想を入れたりした随筆を多く書いた。

周作人は荷風の「日和下駄」（一名「東京散策記」）に触発され、同じ題名の《东京散策记》（知堂という名で、1935年5月刊の《人间世》に発表、後に《苦茶随笔》に収録された）を書き上げた。「日和下駄」、「浮世絵の鑑賞」、「淫祠」の一部も中国語に訳され、その中に書き込まれている。《东京散策记》において、周作人は「荷風は最初、小説をもって名を知られたが、その小説はあまり好きではなく、読んでいる荷風の作品はほとんど随筆やノートである。例えば、『荷風随筆』、『荷風雑稿』、『下谷叢話』、『日和下駄』、『江戸芸術論』など」[5]と荷風文学に対する自分の考え方を述べた。

その後、周作人は知堂という名で1935年6月23日の「大公報」に《冬天的蝇》（後に『苦竹杂记』に収録された）という随筆風の読書ノートを発表した。その中で、周作人は荷風の「冬の蠅」と谷崎潤一郎の「摂陽随筆」に対する深い興味を示し、「『冬の蠅』の中の文章がほとんど好きだ」[6]と述べ、小説家である荷風の随筆に対する賛辞を惜しまなかった。同じように、荷風の「冬の蠅」という題名をそのまま中国語に訳して、自分の随筆の題名にした。その上に、荷風の「冬の蠅」のいくつかの段落を中国語に訳して引用しながら、自分の見方を述べた。「正宗谷崎両氏の批評に答う」や「日和下駄」の内容も多く引用して中に書き入れた。実際には、周作人の「蠅」に関する創作は、荷風よりも早かった。周作人は1921年5月12日の『晨報副刊』に「蒼蠅」という詩を発表し、その後、1924年7月に「蒼蠅」という随筆を書いた。韓玲姫（2011）によると、1920年代、日本文学の中で特に俳句に力を入れて翻訳し、中国文壇に紹介した周作人は、小林一茶の人情味に大きく共感し、特に「蠅」を詠んだ句に愛着を持っている。1935年4月に出版された荷風随筆集「冬の蠅」を読んで、2カ月後、周作人も《冬天的蝇》という随筆を書いて発表した。これも荷風に自らの資質に近いものを感じ取ったためであろう。

《东京散策记》と《冬天的蝇》のほかに、周作人の随筆《市河先生》、《柿子的种子》、《怀东京》など、荷風に言及したり、その作品の題名や内容を直接に中国語に訳して引用したりするものが多量に存在している。周作人による、全篇がまるごと中国語に訳された荷風文学は「東京散策記」の中の「地図」しかない。中国語の題名は《地图》で、知堂という名で1935年6月刊《文饭小品》に載せた。その附記において、周作人は、再び荷風の随筆に対する賛辞を呈し、一方で荷風文学を中国語に翻訳することの難しさを述べた。

周作人による荷風随筆の翻訳には、問題のある箇所があることをここで説明しておく必要がある。「冬天的蝇」において、周作人は「永井则当初作耽美的小说，后来专写市井风俗，有《露水的前后》是记女招待生活的大作」[7]と言っている。「つゆのあとさき」が「露水的前后」と訳されている。「つゆ」は漢字で書くと、「梅雨」あるいは「露」となるが、ここでは中国語の「露水」という意味ではなく、「梅雨」とすべきである。周作人の油断であろう。また、「日和下駄」や「東京散策記」の日本語漢字を中国語漢字にして《日和下驮》、《东京散策记》と訳したが、「日和下駄」、「散策」という二つの言葉は、中国語でそれぞれ「晴天穿的木屐」、「散步」という意味に当たり、「物語」と「哲学」のような日本語を語源とする中国語の言葉として定着しているものではない。そのまま日本語漢字を使って訳すと、日本語のわからない中国の読者には分かるはずがない。ただし、その時、中国語は日本語から数多くの漢字の言葉を借用していたし、周作人は「日和下駄」について詳しく説明してあるから、この訳でも理解可能と判断したのかもしれない。

周作人による荷風文学の紹介と翻訳は、小説より随筆が選ばれ、書評や感想文みたいな要素が多く、通じないところや明らかなミスが存在しており、本格的な荷風文学の中国語訳としては物足りないと感じられるが、荷風文学に対す

る大きな共感や自由闊達であまりこだわらない文人の姿勢がうかがえる。周作人は自らの思想に見合った文章を引用したり翻訳したりして自分の言説を代弁させる習慣があるので、その紹介したり翻訳したりした荷風文学には、中国の文人としての自身に共通している感じ方や考え方が多い。劉岸偉（1991）は周作人の精神の軌跡を論じた際、荷風を主な比較対象としてとらえ、両者に共通する「東洋人の悲哀」を指摘している。したがって、中日両国の文人の共通しているところは戦前の中国で荷風文学が受け入れられた原因だと考えられる。

戦前の中国では、翻訳者が自由に外国の文学作品を選択し、翻訳することには制限などはなかったが、中国語に訳された荷風文学はほんのわずかに限られている。今まで手に入った資料によると、戦前の荷風文学の中国語訳は、断片的なものや雑誌に散在している短編くらいで、完全に翻訳されたのは、5篇の短い随筆にすぎない。しかも、一番多く荷風文学を紹介したり翻訳したりした周作人は、荷風の小説があまり好きではないと言っている。それに反して、荷風の後輩、同じく日本耽美主義文学の代表的な作家である谷崎潤一郎の作品は数多く中国語に翻訳され、出版された。「1928年の『富美子の足』、『痴人の愛』から、『悪魔』が出版された1941年までの間、合わせて19作品が翻訳された」（尹永順，2010：107）。谷崎は、その翻訳者によって日本文壇における「一流作家」と紹介されていた。また、おおざっぱな統計によると、1901年から1949年までの間に、中国では、日本の文化、文芸理論、小説、脚本などに関する著作の中国語訳が約300以上出版された（李芒，1984：17）。王向遠（2001）によると、白樺派の文学は五四時期と五四以後の中国翻訳文学史において、翻訳が一番早く、影響も一番大きいが、それは白樺派の文学の人道主義、理想主義が五四新文学と根本的に一致しているからであるという。小林多喜二、徳永直などのプロレタリア文学作家以外に、森鴎外、国木田独歩、夏目漱石、谷崎潤一郎、佐藤春夫、武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎、芥川龍之介、菊池寛などの作品が数多く中国語に訳されていた。それはつまり、戦前の中国では、荷風やその小説があまり高く位置づけられていなかったということである。荷風文学の魅力や価値は、まだ「国を救う」、「国民を改造する」ことを目指している中国の近代文学者たちによって、十分に認識され、認められていなかったのである。

2. 改革開放以来の中国における荷風文学の翻訳

1972年、日中共同声明が発表され、日中両国の国交が正常化した。1978年の末、中国共産党はそれまでの革命路線から改革開放路線へと大きく舵を切り、経済発展を中心とするようになった。このような大きな時代の流れの中で、中国外国文学学会や中国日本文学研究会などが成立した。日本文学だけでなく、外国文学が大量に中国に取り入れられた。荷風文学も中国に紹介、翻訳されるようになった。日本文学史における耽美主義の紹介をきっかけに、荷風文学が次第に中国の文学者の注目を集め、中国語に訳されてきた。本節では、改革開放以後の荷風文学の中国語訳を見ていく。

2.1. 謝延庄らによる荷風文学の翻訳

1988年3月、四川文芸出版社によって、謝延庄らの共訳した《舞女》（踊子）が出版された（第1図）。これは荷風小説の中国語訳の初めての単行本である。宋再新訳《花街上的风波》（腕くらべ）、胡德友訳《舞女》（踊子）、謝延庄訳《墨东绮谈》（墨東綺譚）と《勋章》（勲章）、林少華訳《隅田川》（隅田川）、程文新訳《美国的故事》（あめりか物語）の6作を収録した。《舞女》は「日本文学流派代表作叢書」という日本文学シリーズの中の一冊である。この叢書は、北京大学の李芒などが編集者で、1985年から

第1図：《舞女》（踊子）
資料所出：筆者撮影

1988年にかけて10社の出版社が共同編集の形で出したもので、森鷗外の「舞姫」、島崎藤村の「家」、田山花袋の「蒲団」、夏目漱石の「坊ちゃん」や「草枕」などの中国語訳も含まれている。

李芒（リー・ボー）は、1920年に遼寧省撫順市で生まれた。11歳の時から、撫順炭鉱附設の小学校で日本人教師に日本語を教えられた。中華人民共和国の建国後、1953年頃から、日本文学作品の翻訳や紹介を始め、中国日本文学研究会が成立した際、副会長を務めた。宋再新は、1952年に吉林省長春市で生まれ、1985年に四川外国語学院大学院を修了して修士の学位を取った後、同校で日本語教師を務めた。中国日本文学研究会の元理事であった。林少華も1952年生まれで、村上春樹の翻訳で名を知られ、今でも中国の有名な翻訳家である。当時、中国広州の暨南大学で日本語教師を務めていた。残念ながら、謝延庄、胡德友、程文新の3人の詳しい個人的な資料は手に入らなかったが、彼らの出版した教科書や発表した論文からすると、当時四川省の大学で日本語に関する教学や翻訳の仕事をしていたことが分かる。

《舞女》の前書きとして、李芒の「美の創造——日本唯美主義文学論」という文学批評が載っている。李芒は、永井荷風と谷崎潤一郎を耽美主義の代表的な作家、佐藤春夫、川端康成、三島由紀夫を耽美主義の傾向をもつ作家と捉え、これらの作家たちの作品を紹介したり批評したりした。荷風文学については、ゾラから消極的な影響を受けて、自然主義から出発し、後に耽美主義に転向したと指摘している。婉曲で詩情に富んだ筆致で年を取った人の枯淡な心境を描き出したと「濹東綺譚」を肯定的に評した一方、思想的に何の取り柄もなく、娼妓と遊客との「売買」関係が美化しすぎられ、「純潔な愛」と読まれてしまうことがあると批判している。ここから、時代的なイデオロギーに限られた中国の日本文学研究者の考え方が窺える。

「腕くらべ」の題名は《花街上的风波》（花柳街の波乱、あるいは花柳街のもめごとという意味）と訳され、原題と全然関係なくなったが、面白そうに見える。翻訳のストラテジーとして意訳という方法を取ったのであろう。ほかの収録されている荷風小説の中国語訳の題名は原題とあまり変わりがない。

この他、文末に注釈が多くついている。注釈の一番多くついているのは「濹東綺譚」で、65箇所もある。後は、「腕くらべ」27箇所、「踊子」5箇所、「隅田川」16箇所、「勲章」1箇所である。日本にしかない物事、歴史事件、欧米の小説家と劇作家などについて詳しく説明している。荷風文学の内包の豊かさとそれを中国語に翻訳することの難しさがうかがえる。

2.2. 李遠喜による荷風文学の翻訳

1990年3月、漓江出版社によって、李遠喜の訳した《争风吃醋》（腕くらべ）が出版された（第2図）。ほかに、《墨东绮谈》（濹東綺譚）、《梅雨前后》（つゆのあとさき）、《雨潇潇》（雨瀟瀟）の3篇も収録されている。「つゆのあとさき」と「雨瀟瀟」の中国語訳は、李訳が初めてのものである。

第2図：《争风吃醋》（腕くらべ）
資料所出：筆者撮影

1956年生まれで、湖南省出身の李遠喜は、現在華南理工大学广州学院外国語学院の教授で、中国社会科学基金プロジェクトの担当者などとして、日本語教育関連分野で活躍している。文化大革命後の1977年に再開された全国統一大学入学試験に合格して、洛陽外国語学院に入学した。国防科技大学や湖北大学に勤めたことがある。李遠喜にインタビューしたところ、《争风吃醋》に関する翻訳や出版の経緯は以下のとおりである。

> 洛陽外国語学院在学中、大衆文学の大佛次郎「道化師」（中国名：丑角）を中国語に訳した。その後、純文学の作品を翻訳しようと考えた。そこで、耽美主義の祖である永井荷風の作品を選んだ。「腕くらべ」などを翻訳していたときは南京の軍隊に所属し

ていた。出版に関することは湖南大学の周炎輝先生に任せた。当時、若者の翻訳作品を出すことが難しかった。《争风吃醋》の斧正や出版にいろいろ周炎輝先生から力を貸していただいた。

前書きにおいて、李遠喜は荷風の生い立ちを紹介し、「墨東綺譚」、「腕くらべ」、「つゆのあとさき」、「雨瀟瀟」のあらすじを説明しながら評価し、荷風の主な作品は娼妓をネタとしているが、猥褻ではないと積極的に評価している。その上に、荷風小説の巧みな構成や随筆的な筆致、詩的な情緒も褒めている。荷風小説における苛められた女への同情、遊女とその愛人との愛情への称揚、遊郭での生活を抜けて一般の生活を始めようとする娼妓に対する肯定的な評価、女性を弄ぶ好色漢に対する批判などを指摘した。作中の主人公の求めている民主と自由、荷風の漢詩の素養、文明批判、反抗精神などにも少しふれた。《争风吃醋》という題名は、初出が佩珊訳の《日本文学史》における荷風文学についての紹介で、日本語では「恋の鞘当て」を意味しており、《花街上的风波》と同じように「腕くらべ」の意訳である。李遠喜訳は、ほとんど注釈がついておらず、なるべく中国文化や中国人読者に馴染むように翻訳されている。

それまでの中国語訳の外国文学作品は主にトップダウンという形で発行された「叢書」や雑誌に載った短編であったが、李遠喜の《争风吃醋》は、翻訳者が自ら選択し、翻訳した初めての荷風小説である。意訳による小説の題目とあまり注に頼らない翻訳の仕方から、翻訳者としての李遠喜の荷風文学に対する愛着や深い理解が見られる。荷風文学の中国語訳を検討する際、李遠喜訳《争风吃醋》は見逃せない一冊である。

2.3. 譚晶華による荷風文学の翻訳

1994年に譚晶華・郭潔敏共訳の《地狱之花》（地獄の花）は上海訳文出版社によって出版された（第3図）。《地狱之花》（地獄の花）、《隅田川》（隅田川）、《墨东趣谭》（墨東綺譚）、《梅雨前后》（つゆのあとさき）、《两个妻子》（二人妻）、《积雪消融》（雪解け）の6篇を収録している。「つゆのあとさき」は郭潔敏訳で、他は譚晶華訳であった。

第3図：《地狱之花》1994年版
資料所出：筆者撮影

譚晶華は1951年に上海に生まれた。長年、日本近代文学の研究と翻訳、日本語と日本文学の教育に携わり、論文や著書、訳書などの成果を数多く上げている。かつて上海外国語大学常務副学長や上海翻訳家協会会長も務め、現在（2019年4月）、中国日本文学研究会会長、上海翻訳家協会主席などを務めている。2016年11月に上海市文学芸術界連合会によって選出された「上海市徳芸双馨芸術家（道徳と芸術ともに優れる芸術家）」の表彰を受けた。2018年11月、荷風の「隅田川」、「つゆのあとさき」、「墨東綺譚」、「雪解け」、「二人妻」などを中国語に翻訳したことで、中国翻訳協会によって「資深翻訳家（ベテランの翻訳家）」として表彰された。郭潔敏は、1956年生まれで、1982年復旦大学外国語学部日本語学科を卒業し、文学学士の学位を取得した。今、上海日本学会理事で、復旦大学日本研究センターの研究員を兼任している。

譚晶華にインタビューしたところによると、長年荷風文学を中国語に訳してきた経緯は以下のとおりである。

荷風作品を翻訳し始めたのは1985年である。その時、上海訳文出版社は中国語訳の「日本文学名著叢書」を計画していた。『永井荷風集』もその中に入っている。編集者から荷風作品の推薦を頼まれ、荷風の研究者である知り合いの平岩昭三に相談した。平岩から永井荷風の代表作の文庫本を5冊郵送してもらった。その中、芸者を描いた代表作「腕比べ」は平岩の最も勧めていたものであったが、当時の中国の文学界で芸者はまだ取り扱い難いものとされていたので、選ばれなかった。「地獄の花」、「隅

第 4 図：《地狱之花》2010 年版
資料所出：筆者撮影

田川」、「濹東綺譚」、「つゆのあとさき」、「二人妻」、「雪解け」の 6 篇を選んだ。1987 年、出版社に翻訳した原稿を渡したが、編集者の吴樹文が日本に行って帰らないままとなったので、出版はなかなか実行できなかった。7 年後の 1994 年、上海訳文出版社による初版の《地狱之花》が漸く出版された。2010 年、初版をもとに改版した黄色い表紙の《地狱之花》（第 4 図）も刊行された。今後、荷風日記の中国語訳なども出そうとしているところである。

第 5 図：《濹东绮谭》
（濹東綺譚）
資料所出：当当網

2012 年 1 月に上海三聯書店によって『濹東綺譚・永井荷風小説選』（第 5 図）が出版された。日本語版と中国語版の二冊で、譚晶華訳の《濹东绮谭》（濹東綺譚）、《各显神通》（腕比べ）、《隅田川》（隅田川）、《两个妻子》（二人妻）、《积雪消融》（雪解け）の 5 篇が収録されている。《地狱之花》（上海訳文出版社 1994 年版）と比べると、「地獄の花」と郭潔敏訳「つゆのあとさき」が削除され、「各显神通」と訳された「腕比べ」が収録されている。他の内容はほぼ変わりはない。日中両文対照のこの作品集によって日本語の学習者たちが小説を楽しみながら日本語も勉強できるので、大いに役に立つものである。

その後、譚晶華は、改めて「腕比べ」を訳した。中国語の題名は 2012 年上海三聯書店版の「各显神通」から変わって、「竞艳」となった。

第 6 図：《竞艳》《地狱之花》《濹东绮谭》
資料所出：上海訳文出版社

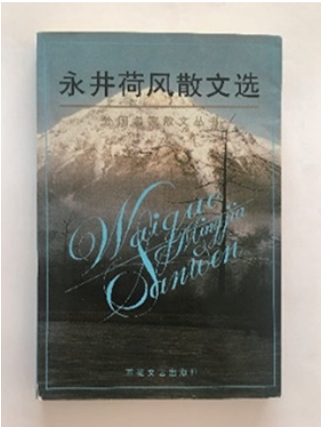
「竞艳」という題名は編集者の意見であるという。改めて訳した《竞艳》（腕比べ）を含め、《濹东绮谭》（ほかに《梅雨时节》郭潔敏訳も収録）、《地狱之花》（ほかに《隅田川》、《两个妻子》、《积雪消融》も収録）という上製本の 3 巻セットは 2018 年 1 月に上海訳文出版社によって発行された（第 6 図）。

譚晶華は前書きにおいて、荷風の生い立ちと著作を詳細に紹介し、「濹東綺譚」と「地獄の花」を中心に収録した小説を紹介しながら批評を加えた。従来多く論じられてきたゾラからの影響、文明批判、反抗精神を除いて、荷風の反戦と反軍国主義、その思想面における江戸懐古傾向を形成した原因、荷風文学を形成した要素の複雑さ、多元的な思想傾向などが指摘されている。各版の前書きは主な内容が同じであるが、修正したところもある。上海訳文出版社 1994 年版の前書きでは、「濹東綺譚」を論じた際、譚晶華は「悪徳の谷底には美しい人情の花と香しい涙の果実が却って沢山に摘み集められる」という荷風の耽美的な考え方を「健全だと言いがたい」と述べ、真っ向から不正暗黒の社会と対決する勇気がないと評したが、上海訳文出版社 2018 年版の前書きでは、このような批評が削除された。社会の発展につれて、道徳や理想ではなく、更なる多元的で複雑な人間の本当の姿から出発して荷風文学を評価できるようになったのである。1985 年に出版できなかった「腕比べ」は、2018 年になると、人目を惹くように小説の題名を艶っぽく訳した方がいいという編集者の意見さえ現われた。このような出版事情の変化について、譚晶華（2018）は、ここから中国人の観念やイデオロギーなどの大

きな変化が見られると述べている。

譚晶華は、長年にわたって荷風文学を翻訳し続け、荷風小説の中国語への翻訳において、この上なく大きな業績を成し遂げた翻訳者である。荷風文学を中国に広めることには大きく貢献した。「地獄の花」、「二人妻」、「雪解け」の中国語訳は、譚訳が初めてのものである。

2.4. 陳徳文による荷風随筆の紹介と翻訳



第7図：《永井荷风散文选》
資料所出：筆者撮影

1997年に陳徳文による《永井荷风散文选》（永井荷風随筆選集）が百花文芸出版社によって出版された（第7図）。「外国名家散文叢書」の1冊であった。この叢書は、英、仏、露、独、日、米、ラテン、そのほかという八部門に分けられ、日本部門は徳富蘆花、島崎藤村、永井荷風、谷崎潤一郎、東山魁夷、川端康成、芥川龍之介の7人による散文選集からなっている。川端康成、芥川龍之介の2人による散文選集を除いて、あとは陳徳文訳である。荷風の散文選集は、主に野口冨士男編『荷風随筆集』（岩波文庫，1994年4月版）に基づいて訳されたものである。

陳徳文は、1940年に中国江蘇省邳県に生まれた。1965年、北京大学東方語学部日本語学科を卒業した。南京大学の日本語教師を務めたとき、その日本語学部の創立に助力した。1976年10月を初めとして何回も日本を訪れた。1985年4月から1年間ほど早稲田大学の特別研究員として、紅野敏郎教授の指導のもとで島崎藤村を研究していた。1989年と1994年に2度日本国際交流基金に招請され、フェローとしてそれぞれ國學院大学と東海大学で日本文学を研究した。1998年から愛知文教大学専任教授、大学院日中文化・文学専攻および古典漢文学の指導教授を担当していた[8]。2017年3月に定年退職した。陳徳文は夏目漱石、三島由紀夫、島崎藤村、川端康成などの小説十余篇、他に徳富蘆花、幸田露伴などの随筆集を数多く翻訳した。その翻訳作品はほとんど人民文学出版社、上海訳文出版社などの大手出版社から出版された。

その後、陳徳文は花城出版社の原稿募集に応じて、「日和下駄」などの荷風随筆を中国語に訳して《晴日木屐》にした。《晴日木屐》は、2012年に「慢読叢書」の1冊として花城出版社によって出版され、2018年5月に再版された。

2018年8月、上海訳文出版社は、アンドレ・ジッド、ヘミングウェイ、ロレンス、永井荷風、モームの5人の文学者の随筆をそれぞれ1冊にして「訳文華彩・漫游」（全5冊）というシリーズを出した。荷風の随筆は陳徳文訳で、《荷风细雨》（荷風細雨）という書名をつけられた。中国語には、穏やかに吹く風と静かにそぼ降る雨を意味する「和风细雨」という言葉がある。「和」と「荷」とは中国語の発音が同じである。このため、『荷風細雨』という題名を読むと、頭の中に細雨の中で和やかに吹いてくる風とともに蓮の花が香るシーンがおのずから浮かび上がってくる。蓮の池から遠くないところに身を置いた臨場感があふれる上に、掛詞によって荷風の名前が巧みに込められている。日和下駄をはき、蝙蝠傘を持って歩き、無用な感慨に打たれるのが何より嬉しいという荷風の淡々とした文学的な趣とぴったり合っている。

陳徳文は《永井荷风散文选》の後書きにおいて、例のように荷風の生涯と作品を紹介し、その随筆を「内容は幅広くて調和しており、風格は優雅で美しい」、「感情に満ちており、奥ゆかしく、趣が渾然一体としている」、「文語体と口語体を併用していながら、洒脱で自在である」[9]というように評価している。さらに、荷風随筆を中国語に訳すことを文学の巨峰の山登りになぞらえ、その難しさがそれまでの翻訳で体験したことのないものであると述べている。

陳徳文による荷風随筆の中国語訳には「围嘴儿（涎掛け）」や「两根萝卜（二股大根）」などさほど適当ではないところがあるにもかかわら

ず、その業績は抹殺できないものである。尊ばれている周作人訳にも間違いがある。日本の作家の随筆や小説を数多く中国語に訳し、数回にわたって何年も日本に留学した陳徳文の訳した荷風随筆に、翻訳の間違いや不適切なところがあることからは、荷風文学の複雑さや、それを中国語に訳すことの難しさが窺える。陳徳文は翻訳の難しさを克服し、荷風随筆の神髄、風格、趣旨、文体などを正確に把握しながら、中国語に翻訳した。《晴日木屐》や《荷风细雨》という中国語の表題は文学者としての荷風のイメージを生き生きと描いている。陳徳文の翻訳作品は、「白玉微瑕」と言っていいもので、荷風随筆の中国語訳の空白を埋めた。

2.5. 陳薇による荷風文学の翻訳

第 8 図：《永井荷風選集》陳薇訳
資料所出：筆者撮影

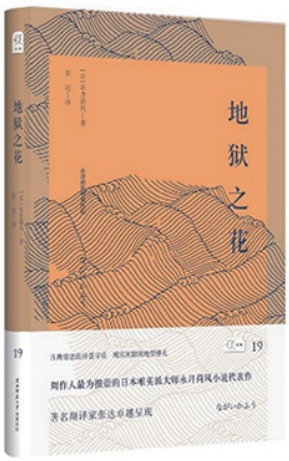
1999 年、陳薇訳の《永井荷风选集》は北京にある作家出版社によって出版された（第 8 図）。《较量》（腕比べ）、《雨潇潇》（雨瀟瀟）、《墨东绮谭》（墨東綺譚）、《欢乐》（歓楽）の 4 篇が収録されている。「腕くらべ」は文字通りに中国語の「较量」と訳された。陳薇は 1961 年生まれ、復旦大学中国語学部を卒業した後、中国作家協会の《文芸報》の記者や編集者を勤めた。1987 年来日、1991 年大阪外国語大学大学院で修士の学位を取った。荷風のほかに、川端康成の小説も翻訳した。

《永井荷風選集》の前書きにおいて、作品の紹介や批評として、筑摩書房の『現代日本文学全集』に収録された吉田精一の論述が引用されている。冒頭と終わりの二つの段落以外は全部中国語に訳された吉田精一の論述である。最後に、文語体のものが荷風作品には多くみられ、できるだけそのニュアンスを中国語で伝えようとしたと述べている。

陳薇訳の荷風小説中国語訳には注が大量についている。「腕くらべ」には 46（四川文芸出版社 1988 年版は 27）、「雨瀟瀟」には 33、「墨東綺譚」には 46（四川文芸出版社 1988 年版は 65）、「歓楽」には 14 箇所の注釈がそれぞれ付けられている。注釈は中日両国の文芸界の有名人や政治家、曲や劇の種類から、歌舞伎役者の屋号と質屋の名前などまで詳しく説明している。小説の主人公の高い身分が窺える三笠という煙草のブランドについても「エジプトから輸入した高級煙草」と説明している。このような注釈は日本の事情がよく分からない中国人の読者の参考になるものである。

立命館大学非常勤講師の陳薇による『永井荷風選集』は、これまでの中国語訳と違って、日本で完成した翻訳作品で、2002 年に第 13 回野間文芸翻訳賞を受けた。陳薇訳が出版されるまでに「歓楽」の中国語訳はなかった。その訳された『永井荷風選集』によって、荷風文学の中国語訳はさらに豊かになった。その上、日本の文学評論家による荷風文学への評価や作品に出た日本の風物についての詳しい説明を知ることが出来る。

2.6. 張達による荷風文学の翻訳



第 9 図：《地狱之花》（地獄の花）
資料所出：当当網

2018 年 1 月、張達訳の《地狱之花》は「悦経典」シリーズの一冊として、陝西師範大学出版社によって発行された（第 9 図）。《地狱之花》（地獄の花）、《隅田川》「隅田川」、《梅雨前后》（つゆのあとさき）、《墨东绮谭》「墨東綺譚」の 4 篇が収録されている。張達は 1973 年生まれで、上海商学院外国語学院の専任講師で、日本文学を専攻している。

前書きにおいて、張達は収録されている小説について紹介しながら、それぞれに批評をつけた。また、荷風文学における文化的、感情的な意味合いを中国語で表すことが難しいので、読者に原文の言語の魅力を十分に体得させるために直訳的な翻訳に力を入れたと同時に、中国の読者が作者の思想や内面をよりよく理解できるように原文の部分的な内容を滑らかで自然な中国語に訳すことにしたと述べている。このように自分の翻訳における「受容化」と「異質化」との折衷的な翻訳ストラテジーについて説明した。さらに、東洋文化と西洋文化との衝突と融合の中で、西方文化をよく理解して優れたものを取り入れる一方、自国の伝統文化を守ろうとする荷風の姿は中国人の学ぶべきものだと指摘した。ここから、中国人が自国文化の重要性を意識したことや中国文化に対する自信を持っている様子が窺える。

張達の訳した4篇の荷風小説は、それ以前に中国語訳が出版されている。だが、張達訳によって、翻訳者が翻訳の方策やストラテジーを重視するようになったことが分かる。積極的に現在の中国の社会や文化に寄与できる発想と考え方を荷風文学に求めている若い世代の翻訳者の姿、中国における荷風文学の受容がいっそう多様化したことが見られる。

2.7. まとめ

以上のほかに、荷風文学の中国語訳には以下の4種のものがある。

1)《断肠亭记》汪正球 訳　河北教育出版社 2002年06月
2)《法兰西物语》陸菁，向軒 訳　南京大学出版社 2010年1月
3)《美利坚物语》向軒 訳　南京大学出版社 2010年1月
4)《雪日》楊暁鐘，曹珺紅ら 訳　陝西人民出版社 2015年3月

その前の翻訳者の中国語訳と比べると重なったものもあれば、それまで翻訳されていないものもある。ただし、同一作品の数回にわたる翻訳が存在している上に、翻訳者の個人的な資料や経歴が不明で、翻訳作の優劣についても評価できないので、ここでは詳しい紹介を略する。

以上のように、荷風文学の中国語訳の出版は盛況である。さまざまな作品の中で、小説と随筆の代表的なものが選ばれ、中国語に訳された。小説の場合、第1表に示した通りに、同じ作品の異なる中国語訳が多い。

第1表　同じ荷風小説の異なる中国語訳

原作	中国語訳	訳された回数
「腕比べ」	《花街上的风波》宋再新訳 《争风吃醋》李遠喜訳 《较量》陳薇訳 《各显神通》譚晶華 (2012) 《竞艳》譚晶華訳 (2018)	5回
「墨東綺譚」	《墨东绮谈》謝延庄訳 《墨东绮谈》李遠喜訳 《墨东趣谭》譚晶華訳 (1994) 《墨东绮谭》陳薇訳 《墨东绮谭》譚晶華訳 (2012) 《墨东趣谭》張達訳	6回
「つゆのあとさき」	《梅雨前后》李遠喜訳 《梅雨前后》譚晶華訳 (1994) 《梅雨前后》張達訳 《梅雨时节》譚晶華訳 (2018)	4回

資料所出：筆者作成

「腕比べ」は、《花街上的风波》宋再新訳、《争风吃醋》李遠喜訳、《较量》陳薇訳、《各显神通》譚晶華訳（2012）、《竞艳》譚晶華訳（2018）という5つの中国語訳があり、計5回訳された。「墨東綺譚」は、謝延庄訳と李遠喜訳とが《墨东绮谈》、譚晶華訳（1994）が《墨东趣谭》、陳薇訳と譚晶華訳（2012）と張達訳とが《墨东绮谭》で、計6回訳された。「つゆのあとさき」は、李遠喜訳と譚晶華訳（1994）と張達訳が《梅雨前后》、譚晶華訳（2018）が《梅雨时节》で、計4回訳された。「地獄の花」、「隅田川」、「雨瀟瀟」の3篇は中国語訳の題名が原題と変わりがなく、それぞれ《地狱之花》、《隅田川》、《雨潇潇》として、3回、4回、2回訳された。随筆集や日記の場合、《永井荷风散文选》、《晴日木屐》、《荷风细雨》、《断肠亭记》、《雪日》などと題名が様々で、収録内容も異なっている。「あめりか物語」や「ふらんす物語」

は、部分的な内容が随筆集に収録されているものもある。

出版されてきたプロセスから見ると、1980年代は、日本近代文学が流派によって分けられ、「叢書」として発行されたことからも分かるように、出版の体系性がうかがえる（叶渭渠，1984：12; 李芒，1992：55）。当時、外国文学の中国語訳の出版は主に中国共産党の指導下でトップダウンという形で行われていた。四川文芸出版社などの10社が共同出版で発行した「日本文学流派代表作叢書」がその代表例である。謝延庄ら訳《舞女》（四川文芸出版社1988年版）は「日本文学流派代表作叢書」中の一冊である。さらに、人民文学出版社によって企画された「日本文学叢書」、上海訳文出版社の「日本文学名著叢書」、百花文芸出版社の「外国名家散文叢書」などがあげられる。《地狱之花》（上海訳文出版社1994年版）はもともと、1985年に計画された中国語訳の「日本文学名著叢書」に入る予定で入稿したが、出版されたのは7年後であった。「外国名家散文叢書」の一冊である陳徳文訳の『永井荷風随筆選集』（1997年版）も叢書の出版の続きだと考えられる。

ここ十数年来、荷風文学は改めて訳されたものや、再版、改版、増補版が多くなってきた。同一作品の違う翻訳者による翻訳の重複もずいぶん現われた。「21世紀に入って、日本近代文学の漢訳と出版はさらに盛んになってきている」（孫立春，2006：32）という時代的な背景がその原因の一つと考えられる。また、耽美主義の祖でありながら、ほかの日本作家と比べると、それまでの中国語訳がわりに多くなかったこと、すでに出版された中国語訳に対して物足りないと感じられること、2009年をもって著作権保護期間が終わったことなどもその原因と考えられる。

さらに、荷風文学におけるゾラからの影響、江戸懐古、漢詩の素養、文明批判、反抗精神、反戦反軍国主義、多元的な思想傾向、東西文明の衝突と融合などの様々な要素が翻訳者たちによって指摘されている。その文学作品の高い芸術性、優雅且つ洒脱で自在な風格、渾然一体としている趣なども高く評価されている。編集者や翻訳者たちによる荷風文学に対する評価から、中国において荷風文学の様々な側面が読まれていること、及び中国の知識人の文学に対する考え方が多元的かつ世界的になってきたことが明らかになった。売春が犯罪や不道徳と見なされた80年代ごろの中国社会のイデオロギーによって、「思想的に何の取り柄もない」という評価から、次第に、東洋文化と西洋文化との衝突と融合の中で、西方文化をよく理解して優れたものを取り入れる一方、自国の伝統文化を守ろうとする荷風、反戦など多元的な思想傾向が含まれている荷風の文学が積極的に評価されるようになった。さらに、翻訳の間違いなどについての議論には読者の荷風文学に対する深い関心がうかがえる。

おわりに

以上のように、中国における荷風文学の紹介と翻訳を二つの時期に分けて検討してきた。荷風が文壇に登った当初から今日にかけての荷風文学の中国への紹介、中国語訳の出版、翻訳者の情報などを考察した。以上の考察から、中国での荷風文学受容のプロセスが明らかにされた。

戦前には、中国で荷風やその小説があまり高く位置づけられていなかったゆえ、紹介や翻訳が少なかった。この時期、一番早く且つ多く荷風文学を中国に紹介・翻訳したのは周作人であった。小説より短い随筆の方が選ばれ、中国語に翻訳され、雑誌や新聞に発表された。中国の文人と共通している感じかた、考え方や資質の「類似性」がその受け入れられた原因だと考えられる。その後、40年ほどの長い間、中国の文壇が荷風文学に注意を払っていなかった空白期間があった。

次に、改革開放以来、中国社会の発展につれて、外国文学が大量に中国に取り入れられてきたと同時に、荷風文学も次第に注目されるようになってきた。改革開放の実行を決めた1978年から、日本文学史における耽美主義の代表的な作家や作品の紹介をきっかけに、中国の翻訳

者が荷風文学に関心を持つようになって、いくつかの小説を選んで訳し、小説集として出版しようとしたが、当時の中国の社会状況で出版できなかったことがあった。中国社会の発展につれて、人々の考え方が次第に変わり、荷風文学を受け入れる社会的な環境や読者層もできた。そうして、荷風文学の中国語訳も出版できるようになり、小説と随筆の代表的なものが選ばれ、数多く中国語に訳され、しかも、次第に翻訳者たちによって度重なって訳されるようになった。これは、テクストの外部にある受容者側の中国社会の発展と密接な関係があると考えられる。逆に、このような中国における荷風文学の受容のプロセスから中国の知識人の考え方や社会の変化が窺える。

テクストの外部にある受容者側の中国社会の発展を除いて、中国での荷風文学のブームを促した根本的な原因は、荷風文学自体の複雑で巧妙な芸術性にあると考えられる。荷風文学に対する評価は翻訳者によって違う。中国語訳を読んだ読者の考え方はさらに十人十色であろう。改革開放以来、中国人は伝統的な中国文化と外来の西洋文化が衝突したり、融合したりする時代に生きている。翻訳者も含めた同じ東洋人である中国の読者は、明治維新後に欧米先進国の文物や制度を導入した日本の近代化時代に生きていた荷風の文学から、自分たちと共通しているものを感じたと同時に、考えさせられたことも多い。今後の課題としては、荷風文学のテクストの内部にある複雑で巧妙な芸術性と、中国における荷風文学の受容と研究を考察の視野に入れて、中国において荷風文学が注目される現状を醸成した原因について、さらに検討を深める必要があると思われる。

（注）

1 「日和下駄」をそのまま中国語に訳して題名としたもの。

2 改革開放とは、中華人民共和国の鄧小平の指導体制の下で、1978 年 12 月に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議で提出、その後開始された中国国内体制の改革および対外開放政策のこと。

3 《日本近三十年小说之发达》，1918 年 5 月刊《北京大学日刊》141-152 号，鐘叔河編《周作人文类编：日本管窥》，p233

4 五四運動（ごしうんどう）を略して「五四」とする。1919 年 5 月 4 日、パリ講和会議のベルサイユ条約の結果に不満を抱き、中国の北京大学の学生を中心に行われた反日街頭行動に端を発し、北京から全国に広がった抗日、反帝国主義を掲げる運動。

5 筆者訳。原文：永井荷风最初以小说得名，但小说我是不大喜欢的，我读荷风的作品大抵都是散文笔记，如《荷风杂稿》，《荷风随笔》，《下谷丛话》，《日和下驮》与《江户艺术论》等。鐘叔河編《周作人文类编：日本管窥》，p385

6 筆者訳。原文：《冬天的蝇》的文章我差不多都喜欢。鐘叔河編《周作人文类编：日本管窥》，p395

7 鐘叔河編《周作人文类编：日本管窥》，p394

8 陳徳文 - 研究者 -researchmap を参照した。https://researchmap.jp/read0056790/（アクセス日 2019-05-20）

9 筆者訳。原文：内容博洽、风格雅丽、意满情深、气致韵成、文白并用、洒脱自如。陳徳文訳《永井荷风散文选》，p308-309

参考文献：

日本語文献：

1. 永井荷風著 ; 野口冨士男編『荷風随筆集』岩波文庫　1986
2. 劉岸偉『東洋人の悲哀――周作人と日本』河出書房新社　1991
3. 湯麗敏　周作人と中国新文学　人文社会学部紀要 1，151-154，2001-03
4. 森雅子　或る女性の影：周作人の文學的出發　中國文學報（2005），69：79-118
5. 尹永順　中国における谷崎文学の翻訳と受

容の変遷：作品の選択と評価を踏まえて　通訳翻訳研究（10），103-120，2010
6. 韓玲姫　周作人における小林一茶の受容：「蠅」を中心に　中国研究月報65（12），15-26，2011-12
7. 張隆溪著；鈴木章能訳『比較から世界文学へ』水声社　2018

中国語文献
1. 鸣田．维新后之日本小说界述概［J］．东方杂志，1921（13）、（14）
2. 谢六逸．近代日本文学［J］．小说月报，1923（11）、（12）
3. 李芒．日本文学在中国［J］．外国文学，1984（04）:17-20.
4. 叶渭渠．日本文学翻译的过去和现在［J］．中国翻译，1984（05）:10-13
5. 李芒．日本文学在中国的翻译和评价［J］．日本学刊，1992（05）:53-58
6. 钟叔河编．周作人文类编：日本管窥［M］．湖南文艺出版社，1998
7. 钟叔河编．周作人文类编：人与虫［M］．湖南文艺出版社，1998
8. 王向远．二十世纪中国的日本翻译文学史［M］．北京师范大学出版社，2001
9. 孙立春．中国的日本近现代小说翻译研究［D］．天津师范大学，2008
10. 田果．永井荷风在中国［D］．首都师范大学，2011
11. 张隆溪．从比较文学到世界文学［M］．复旦大学出版社，2012
12. 谭晶华．从稚嫩苗木到绿树成荫——日本文学翻译的四十年［J］．日语教育与日本学，2018（01）:1-7

中国語の翻訳作品
1. 永井荷风著；谢延庄等译．舞女［M］．四川文艺出版社，1988
2. 永井荷风著；李远喜译．争风吃醋［M］．漓江出版社，1990
3. 永井荷风著；谭晶华，郭洁敏译．地狱之花［M］．上海译文出版社，1994
4. 永井荷风著；陈德文译．永井荷风散文选［M］．百花文艺出版社，1997
5. 永井荷风著；陈薇译．永井荷风选集［M］．作家出版社，1999
6. 永井荷风著；陈德文译．晴日木屐［M］．花城出版社，2012
7. 永井荷风著；谭晶华译．墨东绮谭：永井荷风小说精选［M］．上海三联出版社，2012
8. 永井荷风著；谭晶华译．永井荷风小说精选：竞艳［M］．上海译文出版社，2018
9. 永井荷风著；谭晶华译．永井荷风小说精选：地狱之花［M］．上海译文出版社，2018
10. 永井荷风著；谭晶华译．永井荷风小说精选：墨东绮谭［M］．上海译文出版社，2018
11. 永井荷风著；张达译．地狱之花［M］．陕西师范大学出版社，2018

Translation of Nagai Kafu's literature in China

——On the acceptance of Nagai Kafu's literature from its translation and publication

LYU Na
Graduate School of Science and Research Department, University of East Asia
School of Foreign Languages, Yan'an University
milky007@163.com

Abstract:
Nagai Kafu is a representative writer of Japanese Aestheticism who left many works. Kafu's literature has been constantly read and noticed in Japan. In China, four Chinese translations of Kafu's essays and novels were published in 2018 alone. In addition, it is found that a lot of Kafu's literature has been translated into Chinese in recent decades. The situation of the publication is remarkable. Under such circumstances, there is a significant meaning in studying how his literature is translated in China. Taking the Chinese versions of Kafu's literature as the object, this paper investigates and discusses the translation, publication, and the main translators from then he debuted in the Japanese literary firmament to the present day.
This paper obtained the Chinese translations of Kafu's literature, arranged bibliographical information about the publication, and interviewed the main translator about translation and publishing. Furthermore, it analyzed the viewpoints of editors and translators in terms of the preface and afterword. As a result of the research, the process of acceptance of Kafu's literature in China and the change in the translator's view of Kafu's literature were clarified.

Key words: Nagai Kafu, literature, Chinese translations, publishing